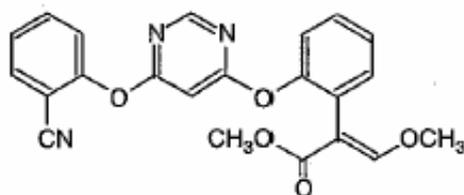


アゾキシストロビン (案)

1. 品目名：アゾキシストロビン (Azoxystrobin)
2. 用途：殺菌剤
ストロビルリン系殺菌剤である。エネルギー生成に重要な役割を果たしているミトコンドリアの電子伝達系の中のコハク酸-CoQリダクターゼ間の電子伝達を阻害することにより作用すると考えられる。
3. 化学名：メチル= (E) -2- {2- [6- (2-シアノフェノキシ) ピリミジン-4-イルオキシ] フェニル} -3-メトキシアクリラート
4. 構造式及び物性



分子式	$C_{22}H_{17}N_3O_5$
分子量	403.4
水溶解度	6.0 mg/L (20°C)
分配係数	logPow=2.5 (20°C)

(メーカー提出資料より)

5. 適用病害虫の範囲及び使用方法
本薬の適用病害虫の範囲及び使用方法は以下のとおり。

作物名となっているものについては、今回農薬取締法（昭和 23 年法律第 82 号）に基づく適用拡大申請がなされたものを示している。

また、申請者から、「国外で使用される農薬等に係る残留基準の設定及び改正に関する指針について」（平成 16 年 2 月 5 日付け食安発第 0205001 号）に基づき、コーヒー豆に設定されている残留基準の変更が要請されている。

(1) 国内における使用方法

①20.0%アゾキシストロビン水和剤（フロアブル）

作物名	適用 病害虫名	希釈 倍数	使用液量	使用時期	本剤の 使用回数	使用方 法	アゾキシストロビン を含む農薬の 総使用回数
小麦	紅色雪腐病	原液	4～8mL/ 乾燥種子 1kg	は種前	1回	種子吹き 付け処理	4回以内 (種子への処 理は1回以 内、は種後は 3回以内)
	うどんこ病 赤かび病 赤さび病	2000～ 3000倍	100～200 L/10a	収穫7日前まで	3回以内	散布	
だいず	紫斑病		100～400 L/10a				収穫21日前まで
		16～ 24倍	800mL/10a				
	腐敗粒 べと病	2000倍	100～400 L/10a	収穫7日前まで	3回以内	散布	
あずき	炭疽病		60～200 L/10a				3回以内
いんげんまめ	炭疽病	2000倍	60～200 L/10a	1回	散布	3回以内	
エンダイブ	菌核病					1回	1回
きゅうり	うどんこ病 べと病	1500～ 2000倍	100～ 400L/10a	収穫前日まで	4回以内		
	灰色かび病 菌核病	1500倍					
にがうり	うどんこ病 べと病、炭疽病	2000倍	100～ 400L/10a	収穫7日前まで	3回以内	散布	3回以内
	うどんこ病 つる枯れ病 べと病、炭疽病	1500～ 2000倍					
うり類 (漬物用)	うどんこ病 つる枯れ病 べと病、炭疽病	1500～ 2000倍	100～ 400L/10a	収穫7日前まで	4回以内	散布	4回以内
メロン	うどんこ病 つる枯れ病 べと病	2000倍					

①20.0%アゾキシストロビン水和剤（フロアブル）（つづき）

作物名	適用 病害虫名	希釈 倍数	使用液量	使用時期	本剤の 使用回数	使用方 法	アゾキシストロビン を含む農薬の 総使用回数		
すいか	つる枯病 炭疽病	2000 倍	100～400 L/10a	収穫前日まで	4 回以内	散布	4 回以内		
トマト	葉かび病 灰色かび病								
なす	うどんこ病 すすかび病								
ピーマン	灰色かび病								
たまねぎ	灰色腐敗病 べと病								
らっきょう	さび病							3 回以内	
ねぎ	さび病							4 回以内	
わけぎ	べと病								
あさつき	黄斑病、黒班病							収穫 3 日前まで	
にら	白斑葉枯病							収穫 14 日前まで	2 回以内
にんにく	さび病							収穫 7 日前まで	3 回以内
だいこん	白さび病							収穫 14 日前まで	
キャベツ	菌核病							収穫 7 日前まで	4 回以内
はくさい	べと病 黒斑病 白さび病								
パセリ	うどんこ病							収穫 45 日前まで	1 回
みつば	灰色かび病							収穫 14 日前まで	
みょうが （花穂）	紋枯病							3L/m ²	収穫 3 日前まで
みょうが （茎葉）		みょうが（花穂）の 収穫 3 日前まで 但し、花穂を収穫し ない場合にあつては 開花期終了まで							
非結球 あぶらな科 葉菜類 （ただし、し ろな、チンゲ ンサイを除く）	白さび病		100～400 L/10a	収穫 21 日前まで		散布			

①20.0%アゾキシストロビン水和剤（フロアブル）（つづき）

作物名	適用 病害虫名	希釈 倍数	使用液量	使用時期	本剤の 使用回数	使用方 法	アゾキシストロビン を含む農薬の 総使用回数		
しろな	白さび病	2000 倍	100～400 L/10a	収穫 14 日前まで	1 回	散布	1 回		
しそ	斑点病			収穫前日まで	2 回以内	株元散布	2 回以内		
クレソン				収穫 21 日前まで	3 回以内	散布	3 回以内		
葉ごぼう	うどんこ病			1 回	収穫 30 日前まで		1 回	1 回	
こおにたびらこ	菌核病								
ははこぐさ									
せり	葉枯病			4 回以内	収穫 7 日前まで	4 回以内	4 回以内		
レタス	菌核病		4 回以内 (土壌灌注は2 回以内)						
	灰色かび病								
	ビッグベイン病	3L/m ²	収穫 30 日前まで	2 回以内	土壌灌注				
いちご	うどんこ病	1500～ 2000 倍	100～400 L/10a	収穫前日まで	苗床 4 回以内	散布	7 回以内 (苗床では 4 回以内、本圃 では 3 回以 内)		
	炭疽病	2000 倍							
	灰色かび病	1500 倍							
	うどんこ病	1500～ 2000 倍			本圃 3 回以内				
	炭疽病	2000 倍							
	灰色かび病	1500 倍							
アスパラガス	茎枯病 斑点病 褐斑病	2000 倍	100～400 L/10a	収穫前日まで	4 回以内	4 回以内			
ズッキーニ	うどんこ病				2 回以内	2 回以内			
畑ワサビ (花穂を除く)	白さび病								
かぶ	うどんこ病				3 回以内	3 回以内			
オクラ	うどんこ病								
さやえんどう 実えんどう	灰色かび病								
てんさい	根腐病				1500～ 2000 倍	100～400 L/10a	収穫 14 日前まで	3 回以内	3 回以内
	葉腐病、褐斑病				1500 倍				
茶	炭疽病、輪斑病 新梢枯死病（輪 斑病菌による）、もち病	2000 倍		摘採 14 日前まで					

②10.0%アゾキシストロビン水和剤（フロアブル）

作物名	適用 病害虫名	希釈 倍数	使用液量	使用時期	本剤の 使用回数	使用方 法	アゾキシストロビン を含む農薬の 総使用回数
なし	黒星病 黒斑病 輪斑病 うどんこ病 炭疽病	1000 倍	200～700 L/10a	収穫前日まで	5 回以内	散布	5 回以内
ぶどう	黒とう病 灰色かび病 べと病 枝膨病 晩腐病 褐斑病 さび病			収穫 45 日前まで	3 回以内		
おうとう	灰星病			収穫前日まで			
もも	灰星病						
ネクタリン	黒星病						
いちじく	そうか病 疫病						
すもも	灰星病 すす点病						
うめ	黒星病	1500 倍		収穫 7 日前まで			
パッションフルーツ	円斑病						
かき	うどんこ病 落葉病 炭疽病 黒点病						
りんご (ふじ、王林、 ジョナゴールド、 つがる、千秋、 さんさ、紅玉、 シナノスイート、 昂林、涼香の季節)	うどんこ病	1000 倍	収穫 45 日前まで				
びわ	炭疽病	収穫 7 日前まで					

②10.0%アゾキシストロビン水和剤（フロアブル）（つづき）

作物名	適用 病害虫名	希釈 倍数	使用液量	使用時期	本剤の 使用回数	使用方 法	アゾキシストロビン を含む農薬の 総使用回数
マンゴー	炭疽病	1000 倍	200～700 L/10a	収穫前日まで	1 回	散布	1 回
グアバ(果実)				収穫 7 日前まで	3 回以内		3 回以内
ピタヤ	炭腐病			収穫前日まで			

③8.0%アゾキシストロビン水和剤

作物名	適用 病害虫名	希釈 倍数	使用液量	使用時期	本剤の 使用回数	使用方 法	アゾキシストロビン を含む農薬の 総使用回数
稲	いもち病 紋枯病 穂枯れ (ごま葉枯病菌)	1000～ 1500 倍	100～200 L/10a	収穫 14 日前まで	3 回以内	散布	4 回以内 (育苗箱散布 は 1 回以内、 本田では 3 回以内)
	稲こうじ病 穂枯れ (すじ葉枯病菌) 変色米 (カーブラリア菌) 変色米 (エピコッカム菌) 変色米 (アルタナリア菌)	1000 倍					
	いもち病 紋枯病	原液					
		8 倍	800mL/10a				
		30 倍	3L/10a				
	いもち病 紋枯病	8 倍	800mL/10a			無人 ヘリコプター による散布	
300 倍		25L/10a	散布				

④1.5%アゾキシストロビン粒剤

作物名	適用 病害虫名	使用量	使用時期	本剤の 使用回数	使用方 法	アゾキシストロビン を含む農薬の 総使用回数
稲	紋枯病	4kg/10a	出穂 10～30 日前	3 回以内	散布	4 回以内 (本田では 3 回以内)

⑤0.6%アゾキシストロビン粉剤

作物名	適用 病害虫名	使用量	使用時期	本剤の 使用回数	使用方 法	アゾキシストロビン を含む農薬の 総使用回数
稲	紋枯病 穂枯れ (ごま葉枯病菌)	4kg/10a	収穫 14 日前まで	3 回以内	散布	4 回以内 (本田では 3 回以内)

⑥4.8%アゾキシストロビン・40.0%TPN水和剤 (フロアブル)

作物名	適用 病害虫名	希釈 倍数	使用液量	使用時期	本剤の 使用回数	使用方 法	アゾキシ ストロビ ンを含む 農薬の総 使用回数	TPNを 含む農薬 の総使用 回数
きゅうり	べと病 うどんこ病 褐斑病 炭疽病 灰色かび病 菌核病 黒星病	1000 倍	100～400 L/10a	収穫前日まで	4 回以内	散布	4 回以内	10 回以内 (土壌灌注は 2 回以内、 散布及びく ん煙及びエ アゾル剤の 噴射は合計 8 回以内)
かぼちゃ	うどんこ病 べと病			収穫 7 日前まで	3 回以内			3 回以内
メロン	べと病 うどんこ病 つる枯病			収穫 3 日前まで	4 回以内			5 回以内

⑥4.8%アズキシストロビン・40.0%TPN水和剤（フロアブル）（つづき）

作物名	適用 病害虫名	希釈 倍数	使用液量	使用時期	本剤の 使用回数	使用 方法	アズキシ ストロビ ンを含む 農薬の総 使用回数	TPNを 含む農薬 の総使用 回数	
すいか	炭疽病 つる枯病	1000 倍	100～400 L/10a	収穫 3 日前まで	4 回以内	散布	4 回以内	5 回以内	
トマト	疫病 葉かび病			収穫前日まで				4 回以内	4 回以内 (土壌灌注は 2 回以内)
なす	すすかび病 うどんこ病 褐色腐敗病 黒枯病								4 回以内
はくさい	べと病 白斑病 黒斑病			収穫 7 日前まで	2 回以内			3 回以内 (は種又は 定植前の土 壌混和は 1 回以内、散 布は 2 回以 内)	
だいこん	白さび病			収穫 45 日前まで	3 回以内			3 回以内	3 回以内
にんじん	黒葉枯病			収穫 21 日前まで	2 回以内			2 回以内	5 回以内 (種子への 吹き付け処 理は 1 回以 内)
たまねぎ	灰色かび病 べと病			収穫 7 日前まで	4 回以内			4 回以内	6 回以内
ねぎ	べと病 さび病 黒斑病			収穫 14 日前まで	2 回以内				3 回以内 (土壌灌注は 2 回以内、 散布は 2 回以内)
にんにく	さび病			収穫 7 日前まで	3 回以内			3 回以内	6 回以内

(2) ブラジルにおける使用方法

作物名	適用 病害虫名	使用量	使用時期	本剤の 使用回数	使用 方法
コーヒー	褐眼病 さび病	0.05kg/ha	収穫 21 日前まで	4 回以内	散布
	褐眼病 さび病 <i>Phoma</i> <i>costarricensis</i>				土壌灌 注

6. 作物残留試験結果

(1) 分析の概要

① 分析対象の化合物

アゾキシストロビン

② 分析法の概要

試料をアセトンで抽出後、多孔性けいそう土カラムクロマトグラフィー、ヘキサン・アセトニトリルで分配し、フロリジルカラムクロマトグラフィー及びシリカゲルカラムクロマトグラフィーで精製し、高速液体クロマトグラフィーで定量する。

検出限界 0.003~0.5ppm。

(2) 作物残留試験結果

① 稲

稲（玄米）を用いた作物残留試験(2 例)において、6%粒剤を 50g/箱（箱施用）、及び 1.5%粒剤を計 3 回散布（4kg/10a）したところ、散布後 35~50 日の最大残留量^{注1)}は<0.01, <0.01 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（玄米）を用いた作物残留試験(2 例)において、6%粒剤を 50g/箱（箱施用）、及び 0.6%粒剤を計 3 回散布（4kg/10a）したところ、散布後 14~28 日の最大残留量は 0.01, 0.02 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（玄米）を用いた作物残留試験(2 例)において、6%粒剤を 50g/箱（箱施用）、及び 8%フロアブルの 1,000 倍希釈液を計 3 回散布（150L/10a）したところ、散布後 13^{注2)}~28 日の最大残留量は 0.04, 0.02 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（玄米）を用いた作物残留試験(2 例)において、6%粒剤を 50g/箱（箱施用）、及び 8%フロアブルの 1,000 倍希釈液を計 3 回散布（150L/10a）したところ、散布後 14 日の最大残留量は 0.03, 0.04 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（玄米）を用いた作物残留試験(2例)において、6%粒剤を 50g/箱（箱施用）、及び 8%フロアブルの 8 倍希釈液を計 3 回無人ヘリ散布 (800mL/10a) したところ、散布後 14 日の最大残留量は <0.01, 0.02 ppm であった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（玄米）を用いた作物残留試験(2例)において、6%粒剤を 50g/箱（箱施用）、及び 20%フロアブルの 500 倍希釈液を計 3 回散布 (25L/10a) したところ、散布後 14~21 日の最大残留量は 0.02, 0.02 ppm であった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（稲わら）を用いた作物残留試験(2例)において、6%粒剤を 50g/箱（箱施用）、及び 1.5%粒剤を計 3 回散布 (4kg/10a) したところ、散布後 35~50 日の最大残留量は 0.84, 0.99 ppm であった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（稲わら）を用いた作物残留試験(2例)において、6%粒剤を 50g/箱（箱施用）、及び 0.6%粒剤を計 3 回散布 (4kg/10a) したところ、散布後 14~28 日の最大残留量は 1.14, 0.54 ppm であった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（稲わら）を用いた作物残留試験(2例)において、6%粒剤を 50g/箱（箱施用）、及び 8%フロアブルの 1,000 倍希釈液を計 3 回散布 (150L/10a) したところ、散布後 13^{注2)}~28 日の最大残留量は 0.54, 0.94 ppm であった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（稲わら）を用いた作物残留試験(2例)において、6%粒剤を 50g/箱（箱施用）、及び 8%フロアブルの 1,000 倍希釈液を計 3 回散布 (150L/10a) したところ、散布後 14 日の最大残留量は 0.52, 0.94 ppm であった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（稲わら）を用いた作物残留試験(2例)において、6%粒剤を 50g/箱（箱施用）、及び 8%フロアブルの 8 倍希釈液を計 3 回無人ヘリ散布 (800mL/10a) したところ、散布後 14 日の最大残留量は 0.64, 1.64 ppm であった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

稲（稲わら）を用いた作物残留試験(2例)において、6%粒剤を 50g/箱（箱施用）、及び 20%フロアブルの 500 倍希釈液を計 3 回散布 (25L/10a) したところ、散布後 14~21 日の最大残留量は 2.32, 1.07 ppm であった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

②小麦

小麦（種子）を用いた作物残留試験(2例)において、20%フロアブルの原液を 8mL/kg（種子処理）、並びに 800 倍希釈液（根雪前）及び 2,000 倍希釈液を計 3 回散布（いずれも 100L/10a）したところ、散布後 7~21 日の最大残留量は 0.02, 0.10 ppm であった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

③だいず

だいず(乾燥子実)を用いた作物残留試験(2例)において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計3回散布(200~250L/10a)したところ、散布後7~21日の最大残留量は0.02, 0.01 ppmであった。

だいず(乾燥子実)を用いた作物残留試験(2例)において、20%フロアブルの8倍希釈液を計2回無人ヘリ散布(800mL/10a)したところ、散布後21日の最大残留量は<0.01, 0.01 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

④あずき

あずき(乾燥子実)を用いた作物残留試験(2例)において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計3回散布(120L/10a)したところ、散布後7~21日の最大残留量は0.01, 0.01 ppmであった。

⑤いんげんまめ

いんげんまめ(乾燥子実)を用いた作物残留試験(2例)において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計3回散布(150~300L/10a)したところ、散布後160~175日の最大残留量は<0.01, <0.01 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

⑥てんさい

てんさい(根部)を用いた作物残留試験(2例)において、20%フロアブルの1,500倍希釈液を計3回散布(200L/10a)したところ、散布後14~30日の最大残留量は<0.01, <0.01 ppmであった。

てんさい(根部)を用いた作物残留試験(2例)において、17%フロアブルの1,000倍希釈液を計3回散布(150L/10a)したところ、散布後14~28日の最大残留量は<0.01, <0.01 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

⑦だいこん

だいこん(根部)を用いた作物残留試験(2例)において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計3回散布(107~250L/10a)したところ、散布後14~28日の最大残留量は<0.01, <0.01 ppmであった。

だいこん(葉部)を用いた作物残留試験(2例)において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計3回散布(107~250L/10a)したところ、散布後14~28日の最大残留量は0.44, 0.14 ppmであった。

⑧かぶ

かぶ(茎葉)を用いた作物残留試験(2例)において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計2回散布(200L/10a)したところ、散布後7~21日の最大残留量は2.36, 8.64 ppmであった。

かぶ（根茎）を用いた作物残留試験(2例)において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計2回散布(200L/10a)したところ、散布後7~21日の最大残留量は0.02, 0.04 ppmであった。

⑨はくさい

はくさい（茎葉）を用いた作物残留試験(1例)において、20%フロアブルの原液を8mL/kg（吹付コーティング）、及び2,000倍希釈液を計4回散布(300L/10a)したところ、散布後7~21日の最大残留量は0.10 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

はくさい（茎葉）を用いた作物残留試験(2例)において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計2回散布(200L/10a)したところ、散布後7~21日の最大残留量は0.06 ppmであった。

⑩キャベツ

キャベツ（葉球）を用いた作物残留試験(2例)において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計4回散布(200L/10a)したところ、散布後7~21日の最大残留量は0.08, <0.01 ppmであった。

⑪こまつな

こまつな（果実）を用いた作物残留試験(2例)において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計2回散布(214~400L/10a)したところ、散布後21日の最大残留量は<0.1, 2.5 ppmであった。

⑫大山そだち

大山そだち（茎葉）を用いた作物残留試験(2例)において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計2回散布(300L/10a)したところ、散布後21日の最大残留量は0.76, 2.19 ppmであった。

⑬サガミグリーン

サガミグリーン（茎葉）を用いた作物残留試験(2例)において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計2回散布(300L/10a)したところ、散布後21日の最大残留量は0.86, 0.92 ppmであった。

⑭しろな

しろな（茎葉）を用いた作物残留試験(2例)において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計1回散布(200L/10a)したところ、散布後14日の最大残留量は0.12, 2.34 ppmであった。

⑮畑わさび（花穂を除く）

畑わさび（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計2回散布（300L/10a）したところ、散布後7～28日の最大残留量は5.86, 11.8 ppmであった。

畑わさび（根茎）を用いた作物残留試験（2例）において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計2回散布（300L/10a）したところ、散布後7～28日の最大残留量は0.82, 0.73 ppmであった。

⑯エンダイブ

エンダイブ（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計1回散布（200L/10a）したところ、散布後21～35日の最大残留量は<0.05, 1.18 ppmであった。

⑰レタス

レタス（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計4回散布（200～300L/10a）したところ、散布後7～21日の最大残留量は1.52, 2.94 ppmであった。

レタス（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を3000L/10a（土壌灌注）及び2,000倍希釈液を計2回茎葉散布（200～300L/10a）したところ、散布後7～14日の最大残留量は2.4, 2.5 ppmであった。

⑱たまねぎ

たまねぎ（鱗茎）を用いた作物残留試験（2例）において、20%フロアブルの1,500倍希釈液を計4回散布（200L/10a）したところ、散布後1～14日の最大残留量は0.02, <0.01 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

⑲根深ねぎ

根深ねぎ（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計4回散布（180～300L/10a）したところ、散布後3～14日の最大残留量は0.96, 0.20 ppmであった。

⑳葉ねぎ

葉ねぎ（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計4回散布（300L/10a）したところ、散布後3～14日の最大残留量は1.42, 1.20 ppmであった。

㉑にんにく

にんにく（鱗茎）を用いた作物残留試験（2例）において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計3回散布（300, 150L/10a）したところ、散布後7～21日の最大残留量は<0.01, <0.01 ppmであった。

②にら

にら（茎葉）を用いた作物残留試験(2例)において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計2回散布(150~200L/10a)したところ、散布後14日の最大残留量は1.10, 2.42 ppmであった。

③アスパラガス

アスパラガス(茎)を用いた作物残留試験(2例)において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計2回散布(250~300L/10a)したところ、散布後1~7日の最大残留量は0.83, 0.13 ppmであった。

④らっきょう

らっきょう(鱗茎)を用いた作物残留試験(2例)において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計2回散布(150L/10a)したところ、散布後3~14日の最大残留量は0.02, 0.02 ppmであった。

⑤にんじん

にんじん(根部)を用いた作物残留試験(2例)において、4.8%フロアブルの1,000倍希釈液を計2回散布(200~400L/10a)したところ、散布後21~28日の最大残留量は0.02, <0.01 ppmであった。

⑥パセリ

パセリ(茎葉)を用いた作物残留試験(2例)において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計1回散布(250L/10a)したところ、散布後45~60日の最大残留量は0.05, 0.33 ppmであった。

⑦みつば

みつば(茎葉)を用いた作物残留試験(2例)において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計1回散布(100L/10a)したところ、散布後14~21日の最大残留量は1.6, 1.7 ppmであった。

⑧トマト

トマト(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、20%フロアブルの1,500倍希釈液を計4回散布(300L/10a)したところ、散布後1~8日の最大残留量は0.40, 0.09 ppmであった。ただし、この試験は、適用範囲内で行われていない。

⑨ピーマン

ピーマン(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計4回散布(200L/10a)したところ、散布後1~7日の最大残留量は1.18, 1.28 ppmであった。

③⑩ なす

なす（果実）を用いた作物残留試験(2例)において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計4回散布(300L/10a)したところ、散布後1~7日の最大残留量は0.26, 0.58 ppmであった。

③⑪ きゅうり

きゅうり（果実）を用いた作物残留試験(2例)において、20%フロアブルの1000倍希釈液を100mL/株（株元灌注）、及び1,500倍希釈液を計3回散布(150~300L/10a)したところ、散布後1~7日の最大残留量は0.20, 0.48 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

③⑫ かぼちゃ

かぼちゃ（果実）を用いた作物残留試験(2例)において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計4回散布(293.3~300L/10a)したところ、散布後1~14日の最大残留量は0.3, 0.3 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

③⑬ すいか

すいか（果実）を用いた作物残留試験(2例)において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計4回散布(168~300L/10a)したところ、散布後1~7日の最大残留量は0.01, <0.01 ppmであった。

③⑭ メロン

メロン（果実）を用いた作物残留試験(2例)において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計4回散布(300L/10a)したところ、散布後1~7日の最大残留量は<0.01, <0.01 ppmであった。

③⑮ オクラ

オクラ（茎葉）を用いた作物残留試験(2例)において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計2回散布(180~250L/10a)したところ、散布後1~7日の最大残留量は1.22, 1.06 ppmであった。

③⑯ さやえんどう

さやえんどう（さや）を用いた作物残留試験(2例)において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計3回散布(200L/10a)したところ、散布後1~7日の最大残留量は0.28, 1.30 ppmであった。

③⑰ みょうが

みょうが（花穂）を用いた作物残留試験(2例)において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計4回散布(3000L/10a)したところ、散布後3~14日の最大残留量は

0.50, 0.34 ppm であった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

⑳ りんご

りんご（果実）を用いた作物残留試験(2例)において、10%フロアブルの1,000倍希釈液を計5回散布(500L/10a)したところ、散布後42日の最大の残留量は0.23, 0.03 ppm であった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

㉑ 日本なし

日本なし（果実）を用いた作物残留試験(2例)において、10%フロアブルの1,000倍希釈液を計5回散布(500L/10a)したところ、散布後14~42日の最大残留量は0.60, 0.36 ppm であった。

日本なし（果実）を用いた作物残留試験(2例)において、10%フロアブルの1,000倍希釈液を計5回散布(500L/10a)したところ、散布後1~7日の最大残留量は0.68, 0.35 ppm であった。

㉒ もも

もも（果実）を用いた作物残留試験(2例)において、10%フロアブルの1,000倍希釈液を計3回散布(500L/10a)したところ、散布後1~7日の最大残留量は<0.01, 0.01 ppm であった。

もも（果皮）を用いた作物残留試験(2例)において、10%フロアブルの1,000倍希釈液を計3回散布(500L/10a)したところ、散布後1~7日の最大残留量は2.57, 6.42 ppm であった。

㉓ ネクタリン

ネクタリン(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、10%フロアブルの1,000倍希釈液を計3回散布(400L/10a)したところ、散布後1~14日の最大残留量は0.5, 1.4 ppm であった。

㉔ すもも

すもも（果実）を用いた作物残留試験(2例)において、10%フロアブルの1,000倍希釈液を計3回散布(300~400L/10a)したところ、散布後1~14日の最大残留量は0.12, 0.09 ppm であった。

㉕ おうとう

おうとう（果実）を用いた作物残留試験(2例)において、10%フロアブルの1,000倍希釈液を計3回散布(300~400L/10a)したところ、散布後1~14日の最大残留量は1.30, 0.47 ppm であった。

㉖ いちご

いちご（果実）を用いた作物残留試験(1例)において、20%フロアブルの1,500

～2,000倍希釈液を計5回散布(300L/10a)及び1,000倍希釈液を計3回土壌灌注(100mL/株)したところ、散布後1～7日の最大残留量は1.20 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

いちご(果実)を用いた作物残留試験(1例)において、20%フロアブルの1,500～2,000倍希釈液を計8回散布(300L/10a)したところ、散布後1～8日の最大残留量は1.18 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

④5ぶどう

ぶどう(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、10%フロアブルの100倍希釈液を300～500L/10a(休眠期散布)及び1,000倍希釈液を計3回散布(500L/10a)したところ、散布後45～75日の最大残留量は4.22, 1.68 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

④6かき

かき(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、10%フロアブルの1,000倍希釈液を計3回散布(300, 400L/10a)したところ、散布後7～21日の最大残留量は0.05, 0.36 ppmであった。

④7パッションフルーツ

パッションフルーツ(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、10%フロアブルの1,000倍希釈液を計3回散布(300L/10a)したところ、散布後1～7日の最大残留量は0.33, 0.30 ppmであった。

④8いちじく

いちじく(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、10%フロアブルの1,000倍希釈液を計3回散布(230～300L/10a)したところ、散布後1～14日の最大残留量は0.25, 0.57 ppmであった。

④9茶

茶(荒茶)を用いた作物残留試験(4例)において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計3回散布(200L/10a)したところ、散布後14～21日の最大残留量は4.75, 2.62, 0.80, 3.46 ppmであった。

茶(浸出液)を用いた作物残留試験(4例)において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計3回散布(200L/10a)したところ、散布後14～21日の最大残留量は2.50, 1.34, 0.42, 1.28 ppmであった。

④0びわ

びわ(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、10%フロアブルの1,000倍希釈液を計3回散布(400L/10a)したところ、散布後7～21日の最大残留量は0.017, 0.008 ppmであった。

⑤① うめ

うめ（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、10%フロアブルの1,500倍希釈液を計3回散布（250～300L/10a）したところ、散布後1～14日の最大残留量は0.6, 0.7 ppmであった。

⑤② わけぎ

わけぎ（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計4回散布（150～400L/10a）したところ、散布後7～14日の最大残留量は0.1, 0.4 ppmであった。

⑤③ あさつき

あさつき（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計4回散布（150～200L/10a）したところ、散布後3～14日の最大残留量は1.5, 0.8 ppmであった。

⑤④ シソ

シソ（葉）を用いた作物残留試験（2例）において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計2回株元散布（200L/10a）したところ、散布後1～7日の最大残留量は0.11, 0.04 ppmであった。

⑤⑤ せり

せり（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計4回散布（200L/10a）したところ、散布後7～21日の最大残留量は0.7, 0.8 ppmであった。

⑤⑥ マンゴー

マンゴー（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、10%フロアブルの1,000倍希釈液を計1回散布（200L/10a）したところ、散布後1～7日の最大残留量は0.4, 0.5 ppmであった。

⑤⑦ クレソン

クレソン（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計3回散布（150L/10a）したところ、散布後21日の最大残留量は<0.20, 0.26 ppmであった。

⑤⑧ 葉ごぼう

葉ごぼう（植物体全体）を用いた作物残留試験（2例）において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計1回散布（200L/10a）したところ、散布後21～28日の最大残留量は2.2, 1.6 ppmであった。

⑤⑨ ホトケノザ

ホトケノザ(茎葉)を用いた作物残留試験(1例)において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計1回散布(150L/10a)したところ、散布後30~60日の最大残留量は0.86 ppmであった。

⑥⑩ ゴギョウ

ゴギョウ(茎葉)を用いた作物残留試験(2例)において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計1回散布(150L/10a)したところ、散布後30~60日の最大残留量は0.36 ppmであった。

⑥⑪ みずな

みずな(茎葉)を用いた作物残留試験(2例)において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計2回散布(265~391L/10a)したところ、散布後21日の最大残留量は0.4, 2.4 ppmであった。

⑥⑫ ズッキーニ

ズッキーニ(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、20%フロアブルの2,000倍希釈液を計4回散布(250L/10a)したところ、散布後1~7日の最大残留量は0.2, 0.2 ppmであった。

⑥⑬ グァバ

グァバ(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、10%フロアブルの1,000倍希釈液を計3回散布(139L/10a)したところ、散布後7~21日の最大残留量は0.03, 0.08 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

⑥⑭ ピタヤ

ピタヤ(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、10%フロアブルの1,000倍希釈液を計3回散布(188L/10a)したところ、散布後1~14日の最大残留量は1.38, 0.26 ppmであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

これらの試験結果の概要については、別紙1-1を参照。

また、海外で実施された作物残留試験成績の結果の概要については、別紙1-2を参照。

注1) 最大残留量：当該農薬の申請の範囲内で最も多量に使い、かつ最終使用から収穫までの期間を最短とした場合の作物残留試験(いわゆる最大使用条件下の作物残留試験)を実施し、それぞれの試験から得られた残留量。

(参考：平成10年8月7日付「残留農薬基準設定における暴露評価の精密化に関する意見具申」)

注2) 経過日数13日の試験については、本来最大使用条件下として定められた14日の試験成績の誤差範囲内とみなし、当該試験成績を暴露評価の対象としている。

7. 乳牛における残留試験

乳牛に対してアゾキシストロビン 0、5、25、75、250ppm を含有する濃厚飼料(20kg/day) を牧草と共に 27～30 日間にわたり摂食させ(それぞれ 0、100、500、1500、5000mg/頭/day に相当)、牛乳、皮下脂肪、腹腔内脂肪、胸筋、大腿部の内転筋、肝臓及び腎臓に含まれるアゾキシストロビン含量を測定したところ、下記のとおりであった。なお、牛乳については、投与開始後 1、3、5、7、12、14、17、21、26、29、30、31 日目に搾乳したものを測定した。(検出限界：牛乳 0.001ppm、牛乳以外 0.01ppm)

上記の結果に関連して、米国では肉牛、乳牛及び豚における最大理論的飼料由来負荷(MTDDDB)はそれぞれ 74ppm、106ppm、10ppm と評価している。また、オーストラリアにおいては家畜への MTDDDB を 20.3ppm と評価している。

表. 組織中の最大残留 (ppm)

	5ppm 投与群	25ppm 投与群	75ppm 投与群	250ppm 投与群
大腿部内転筋	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
胸筋	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
肝臓	<0.01	0.01	0.05	0.07
腎臓	<0.01	<0.01	0.01	0.02
腹腔内脂肪	<0.01	<0.01	0.03	0.03
皮下脂肪	<0.01	<0.01	0.02	0.02
牛乳	0.003	0.006	0.004	0.009

8. 産卵鶏における残留試験

産卵鶏に対してアゾキシストロビン 0、6、18、60ppm (0、0.72、2.16、7.2mg/鶏/day) を含有する飼料を 28 日間にわたり摂食させ、筋肉、肝臓及び脂肪中のアゾキシストロビン含量を測定したところ最高投与群においていずれも <0.01ppm であった。また、鶏卵についても投与開始後 1、3、7、10、14、18、21、25、28 日に採卵し分析したところ、最高投与群においていずれも <0.01ppm であった。

上記の結果に関連して、米国では MTDDDB は 7ppm として、オーストラリアでは 0.003ppm と評価している。

9. ADI の評価

食品安全基本法(平成 15 年法律第 48 号)第 24 条第 1 項第 1 号の規定に基づき、平成 16 年 11 月 30 日付厚生労働省発食安第 1130001 号及び同法第 24 条第 2 項の規定に基づき、平成 18 年 7 月 18 日付厚生労働省発食安第 0718005 号により食品安全委員会あて意見を求めたアゾキシストロビンに係る食品健康影響評価について、以下のとおり評価されている。